

カラダが語る人類文化前史 ―人類学の誤認史として―

渡邊 欣雄

1 まえおき

2011年12月10日、「カラダが語る人類文化」というシンポジウムが、神奈川大学で行われた。わたしはこの大学の「機構運営委員」として、西海賢二さんとともにこのシンポジウムの「司会・進行」を任せ、かつ「総括」を執筆するよう求められた。当日の発表者でもパネラーでもなく、じつは「総括」そのものの役でもなかったはずだから、何を書くべきかの定型はないはずだ。

加えて「司会進行」役だったとはいえ、そもそもわたしは、このシンポジウムの企画に参加していたわけではない。まさに執筆すべき内容は以上に述べたような立場なのだから、まったくないと思われるが、このシンポジウムの「カラダが語る人類文化」という主題や「形質から文化まで」という副題は、考えてみればわたしの学んだ学問である＜人類学＞の発生に深く関係している。わたしは司会進行役をつとめながら、そんなことを頭に思い浮かべていた。

そこで、このたびのシンポジウムに対する総括というより雑感を、わたしなりに記すことにした。それは早期人類学やその後に生じた文化人類学が、じつは「カラダが語る人類」論から発生し、副題にある「形質から文化まで」の学説史的な流れを経て、「カラダが語る人類文化」論まで考えた時代に至り、文化人類学が胚胎したということ、そんなことを述べておきたいと思う。

しかし、このような認識の歴史は＜人類や人類文化に対する誤認の歴史＞でもあった。こんにちある学問は、往々にして諸現象に対する＜誤認＞から発生している。そんな＜誤認＞の繰り返しがそれぞれの学説史となってきた。これから述べるような内容の「人類学」も「自然人類学」も、はたまた「文化人類学」も、現在には存在しない。ただ読者に知ってほしいのは、＜誤認＞が今日に至る科学発展の原動力になってきたということだ。＜誤認史＞を葬ってはならない。

2 誤りの科学から始まった人類学

いまは自然人類学あるいは形質人類学と文化人類学とに分かれていて、双方の人類学を同一学科や専攻で教えている大学は皆無に等しいと思われるが、かつては東大、埼玉大など、文化人類学教室でありながら自然／文化を分かつたぬ（総合）人類学の教育がなされていた。わたしも、そんな教育を受けた一人だった。だからこのたびのシンポジウムに対しては、独特な感情をわたしは抱くことになった。それはシンポジウムのタイトルから、早期人類学の内容を想起した点である。

人類学は地理学と同様、まずは自然／文化を分かつたぬ時代から始まった。それはブルーメンバッハ（J. F. Blumenbach 1752-1840）による名付けからだ。彼は著書『自然の人類変種』（1795）という本の中で、自分の学問に初めて「Anthropologie（人類学）」という名を用いたとされる。もっともほぼ同じ頃、哲学者カント（I. Kant 1724-1804）も、著書『実践的見地からの Anthropologie』（1798）という本を著して、この本のタイトルをして、これを「～人類学」と邦訳しても、むろん間違いはない。ただし、われわれはカント哲学の Anthropologie を「(哲学的) 人間学」と訳して区別し、カント哲学の流れを「人類学」の対象外としてきたが、果たしてそうすべきなのかどうか疑問のままである。

さてブルーメンバッハだが、彼は1775年の著書『人類の変種』において「変種」（人種）を5つに分類した。つまりはコーカサスすなわち白色人種、モンゴルすなわち黄色人種、エチオピアすなわち黒色

人種、アメリカすなわち赤色人種、マレーすなわち褐色人種である。彼はなにも肌色だけを基準として「人類の変種」を分類したわけではなく、髪の毛のかたち、頭の形状、顔面の形状、そして鼻形の基準にまで比較の基準が及んでいた。

しかし同時に彼自身の言葉でいうなら、「(人間のカラダの部位・色彩による分類は) 恣意的なものであり、相互間の違いは程度の問題にすぎない」ことを自覚していた。しかし初期人類学は、のちのちに本質視されるようになる「人種」分類¹から開始されたこと、すなわちこんにちの人類学では「人種」の学問的価値はまったくないばかりか、「人種差別主義」を助長してきたことを考えると、＜誤りの科学知識＞から学問が始まったことになり、この点についてわたしはたいへん興味をもっている。

わたしのもう一つの専門である「地理学」だって同じなのだ。ヨーロッパ地理学は相貌術 (physiognomy) から始まった。それは人相と同じように大地にも地相があるとし、地相の「相」を感覚的に見分けることによって、土地の環境の個性を知ろうとしたことから始まった。その方法は直観によっていたが、のちのち自分の感覚を離れた、「地理学 geography」に名を変えて発展している。その歴史的経緯が中国発祥の「風水」と同じではないかとして、わたしはこれまで「地理学」を相対視し客体化して研究してきた。だから「人類学」もまた客体化すべきであろうということで、わたしはこの学問の発祥に興味を持ち続けているのである。

「人類学」は「人類」に対する＜誤りの分類＞から、「カラダが語る人類」について述べてきた。ではいつごろから、その＜誤り＞を引き継いで「文化」の研究にまで発展していったのだろうか？「文化人類学」は一般に革命的な「文化」定義を施したタイラー (E.B.Tylor 1832-1917) から始まったとされるが、どうしてどうして文化人類学にも＜誤りの科学知識＞を持っていた時代としての、その前史があるのだ。

3 誤りの認識、すなわち文化人類学前史

現代の学問や科学は、こんなグローバリズムの時代、脱領域的でボーダレスの時代でさえ、「固有の××学」というセクト主義からなっていることに変化がない、しかし、こんにちのセクト主義的な学問が成立する前、むしろ学問領域は凝り固まっていなかった。

たとえばマイネルス (C.Meiners 1747-1810)、クレム (G.Klemn 1802-1867)、ラボック (L.A.J.Lubbock 1834-1913) らの時代がそれだ。

彼らと同時代の研究者にあたるブシェー・ド・ペルト (J.Bousher de Perthes 1783-1868)。彼はすでに聖書に書かれた天変地異による古生物の滅亡説、すなわち古生物の存在さえ否定しようとした当時の学問的権力に抗して「10 万年前人類起源説」を唱え、太古の人類はすでに言語・芸術・風習など粗末だが、「文化」を持った生活がなされていたと推測していた。つづくライエル (C.Lyell 1797-1875) もまた、天変地異説に反対して、化石こそ古生物であり、現存している生物と比較することによって、生物の発生年代を推定することができると考えていた。

彼らのこうした＜信念＞があつてこそ、1865 年のネアンデルタール人の発見に始まる、当時の一連の原生人類の発見につながるのである。

さてマイネルスだが、ブルーメンバッハ時代の一連の指摘、すなわち人類の身体的特徴による人類の分類を、彼はさらに人類の文化的特徴と関連づけて、「人類の歴史」を再構成しようとした。すなわち世界にはモンゴル系民族とコーカサス系民族があり、その文化（食料、住居、衣服、装身具、意識、教育、法律、政治、富、道徳など）について民族誌風に述べていた (1785)。マイネルスはそれを発展させて、人類はモンゴロイドすなわち受動的・女性的人類から、コーカソイドすなわち能動的・男性的人類へと発展したと推測した。発展変化は野蛮状態から温順状態を経て、自由状態へと段階を踏むというこ

と。のちのちの古典的進化主義に引き継がれる多くの偏見が、すなわち当時の「カラダが語る人類文化」そのもののイデオロギーが、この時代に胚胎していた。

そしてラボックだが、彼は当時の先史学、考古学、古生物学、進化学などの一連の成果を引き継いで、現在生活している「未開人」の生活から、発見された原生人類の生活を推測するという＜研究成果＞をあげていた。すなわち「現存する『未開民族』は過去の人類だ」ということである。現存の「未開人」も過去の「原始人」も、等しく野蛮で粗野な動物に近い状態で、羞恥の感覚がなく宗教を持たず、食人習俗がある残酷な人間であるという、この時代には一般的になっていたヨーロッパ中心主義の視点は、のちのちの古典的進化主義人類学隆盛の時代の先駆けとなっていた。

4 あとがき

こんにちの人類学に、こうした誤りの認識の痕跡はない。またこのたびのシンポジウムでの発表に、このような認識での発表はむろんなかった。ここに示した指摘に近い発表といえ、竹沢泰子さんの発表であり読者は多くの啓発を受けるだろう。

わたしがここで言いたいことは、こんにちのほとんどの学問が、こんにちから見れば＜誤った認識＞から学問を興し、しだいに認識を改めてきた長い歴史を背負っていることだ。現代人類学に、もはや「未開人」、「未開民族」が存在するという認識がなくなった。と同時に、「原始人」もわれわれの頭脳から消滅した。したがって現在の「未開人」が、過去の「原始人」だとする認識はもはやまったく過去のものである。

なおまた人体（カラダ）の形質的特徴が、文化を特徴づけるという考え方も否定されてこんにちに至っている。「文化は有機体（身体）からは説明できない。文化は超有機体である」。文化の超有機体説は、もとよりクローバー（A.L.Kroeber 1876-1960）の発想だが、有機体から文化を説明しようとした18～19世紀の発想は、こんにち追認する余地はまったくくない。

註

1——「人種」の概念はビュフォン（G.L.L.Buffon 1707-1788）によるとされている。

参考文献

Girtler, R. 1979 *Kulturanthropologie*, München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
 Malefijt, A. de W. 1974 *Images of Man: A History of Anthropological Thought*, New York: Alfred A. Knopf, INC.
 Tischner, H. 1959 *Völkerkunde*, Frankfurt: Fischer Taschenbuch Verlag.
 納日碧力戈 2001 『人類学理論的新格局』、北京：社会科学文献出版社
 鄭金徳 1980 『人類学理論發展史』、台北：台湾商務印書館
 渡邊欣雄 2001 『風水の社会人類学－中国とその周辺比較－』、東京：風響社